

单士釐とロシア：一九〇四年の『癸卯旅行記』を中心に

蕭，燕婉
台湾・中山医学大学応用外国語学科助理教授

<https://doi.org/10.15017/20559>

出版情報：中国文学論集. 40, pp.119-132, 2011-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

单士釐とロシア

——一九〇四年の『癸卯旅行記』を中心に——

蕭 燕 婉

はじめに

清末の激動期に、单士釐（一八五八—一九四五）は外交官の夫人として、一九〇三年の三月、夫の錢恂（一八五三—一九二七）とともに、日本、中国、朝鮮、ロシアの四方国の旅行に出発した。彼女がこの旅での見聞を綴った『癸卯旅行記』は、近代中国史上最初の女子による出国記である。これまで单士釐について、谷川栄子氏は、中国近代女性史研究の視点から、单士釐の女性観及び彼女の見た日本、朝鮮、ロシアの現状を考察している¹⁾。また筆者は以前、单士釐と西洋を模範とした明治の日本について検討を行ったが、これらの单士釐に関する研究は、主として彼女が日本、朝鮮、ロシアの自然環境、近代産業、教育制度、鉄道敷設をいかに捉えていたかを論じたものと言えよう。

单士釐は『癸卯旅行記』にみられるように、日本とロシアの社会の実情のみに強い興味を示していたわけではない。というのは、四方国への旅行に出発する前の一九〇九年から一九〇三年にかけて、单士釐は日本に長期滞在していたため、日露両国人の気質や文化的差異も、自ずと彼女の観察の対象となっている。いったい、单士釐はロシアをどのように認識し、またこれと対比して、中国の現状を如何に捉えていたのであるか。また、日本語が堪能な单士釐は、ロシアを訪れる前に、すでに福島安正の『単騎遠征録』や田辺朔郎の『西伯利鉄道』といったシベリア踏破の書物を読み耽っていたが、日本での滞在経験や日本人の著作は、彼女の『癸卯旅行記』にどのように反映されたのであろうか。本論文は单士釐に関する先行研究を踏まえつつ、以上に述べた問題の解明と共に、清末の海

外旅行記の中での『癸卯旅行記』の位置づけ、及びその時代的意義をも併せて探るものである。

因みに二〇一〇年、中国近代史研究者の鈴木智夫氏は、『癸卯旅行記』に現れる地名、人名、歴史事件に詳細な注を施した^②。以下、『癸卯旅行記』の日本語訳は鈴木氏の訳に拠り、年数表記はすべて西暦で記すこととする。

一、清代におけるロシア紀行の系譜

清の朝廷が初めて積極的に官僚を派遣し、西洋の政治や社会を直接観察するようになるのは一八六〇年代以降のことである^③。西方列強による蚕食の脅威が目前に迫った一八七〇年代後半、清朝はようやく「常駐外交使節」の制度を導入し外交官を各国に派遣した。一八七六年に派遣された駐英公使郭嵩燾や、一八七七年に駐日公使となった何如璋らは、それぞれ日記を遺している。それが郭嵩燾『使西紀程』と何如璋『使東述略』である。ロシアを題材とした清代知識人の旅行記も、世界情勢への関心や中国の富強の要求が高まる時代的な雰囲気の中で、次々と登場するようになった。

まず、一九〇四年に出版された『癸卯旅行記』^④以前の、男性知識人の手になるロシア旅行記を見てみよう。外国事情の紹介や中国辺境をめぐる争いへの関心を喚起するという目的のため、王錫祺（一八五五—一九一三）は『小方壺齋輿地叢鈔』（光緒十七年）、同『補編』（光緒二十年）、同『再補編』（光緒二十三年）という浩瀚な輿地叢書の編集に携わっている。この『小方壺齋輿地叢鈔』をはじめとする叢書によれば、ロシアの「形勢考」、「源流考」、「疆域考」などといった客観的な考証を除けば、清代の知識人が書いたロシアへの旅日記には凡そ以下のようなものがある。図理探『異域録』、張鵬翮『奉使俄羅斯日記』、錢良擇『出塞紀略』、丁寿祺『海隅從事錄』、張德彝『使俄日記』、曾紀澤『金輶籌筆』、繆祐孫『俄遊日記』、王之春『使俄草』である。

上記の著作中、王之春の『使俄草』だけが『補編』第三帙に収められており、そのほかはすべて『小方壺齋輿地叢鈔』第三帙に見られる。そして、著者たちの身分は清朝の対外公使、或いは在外公使館の随員や参贊（書記官）であったことが注目される。実は、光緒三年（一八七七）の総理衙門の上奏によれば、公使の職の虚設を防ぐために、

出使大臣は総理衙門に日記を提出しなければならなかったのである。これらの使節が日記に記したのは、殆どが駐在の間に会った人物や、その国の独特な風俗習慣、見学した政教に関わる施設などである。つまり、このような清末の役人によるいわば公的な日記は、もともと文学的意図のもとに書かれたものではなく、外国との交渉や西洋の制度・文物を克明に記録しておくとする使命感の産物であったと看做すべきであろう。

ところで、単士釐の『癸卯旅行記』は、上に掲げた著作と同じように日記の形式で綴られている。女性による海外旅行記は、上記の男性知識人の著作と比べると、外交をめぐる問題や外国使節との交渉経緯などについての描写が欠けているのは勿論のことであろう。しかし、『癸卯旅行記』の錢恂の題記に「方今、女学漸次萌り、女智、漸く開けば、必ず此を読むを樂しむ者有らん」とある。したがって、中国女性の啓蒙や清朝の発展につながる海外情報を紹介する目的からすれば、『癸卯旅行記』は決して孤立した存在ではなく、やはり異文化に急速に接した清末に著された海外旅行記の流れに連なるものと考えられよう。

二、『癸卯旅行記』における日露比較の視野

ところで、外交使節の夫人である単士釐は、どのようにロシアを観察し、ロシア人の「気質」についてどのような認識を持っていたのであろうか。この問題を探る前に、まず、一九〇三年以前の中露外交史を振り返ってみよう。一八九七年に「中露合弁東清鉄道会社合同章程」が結ばれ、中国はロシアに鉄道建設に必要な土地を提供しなければならなくなった。一八九八年、ロシアは旅順・大連を租界として入手し、東清鉄道の敷設権を獲得して、一九〇三年には全線の敷設を完了した。また義和団の乱後の一九〇一年、ロシアは満州（遼寧、吉林、黒龍江）に大量の兵力を残して、同地をロシア領にしようと画策した。一方、当時の日本も積極的に満州・朝鮮で主導権を掌握しようと企図していたため、ロシアとの対立は深まった。単士釐が旅行した一九〇三年は、まさに日露間の緊張が高まりつつある時であり、中国東北地方はロシア勢力の支配下に置かれ、あたかも半植民地の様相を呈していた。

一九〇三年五月八日、単士釐はハルビンに到着した。五月九日、錢恂は乗車の便宜を謀ってもらうために、ハル

ピン鉄道会社で働く友人李佑軒と共に、東清鉄道建設局長の全権代理人達尼爾を訪ねた。五月十日の日記の中で、単士釐は最初に出会ったロシア人達尼爾との交渉についてこう述べている。

今日、即ち李君に伝訳（通訳）を頼み、其の夫婦を往訪（訪問）せり。（ダニエル夫婦と）相い見え、（彼らの）待客の懇懃、日本人より一層の親切を加うるを覚ゆ。且つ自ら器機を出して写真を撮り、（予等に後日）贈るを訂（約束）せり。「此の贈を訂せし者、今に至るも獲ず」。外子云う、「此、小節（さいさいなご）と雖も、亦た俄人外交の一手腕を見る可し」と。

最初、単士釐は達尼爾の懇懃な態度を、日本人よりも親切なものと素朴に受け止めていたらしい。しかし、錢恂はロシア人の交渉態度が日本人よりも「懇懃」であるからこそ、まさに警戒すべきものだと言っている。翌日、単士釐は手練手管に長けた達尼爾の本当の姿に気づかされ、ロシア人に対する最初の好印象も変化している。その詳しい事情について、彼女は五月十一日の日記に、

比登車（ひとうしや）すれば、即ち達尼爾（ダニエル）の允す所の「一等位四人二室」なる者、有るは無き也。（有るは、乃ち「（一等位）四人一室」の者也。謂う所の「一車にて森堡（モンスボルク）に直達する」なる者は然らざる也。且つ「莫斯科（モスクワ）に直達」するに非らず、乃ち僅かに満州里に達する者也。……、最も困難を感じし者、二事（有り）。一、已に達尼爾の言を信じ、森堡使館（ペテルブルクの中国公使館）に電するに到着の期を以てし、且つ「森堡に直達すれば、人の迎うるを須（ま）無し」と言いしことなり。……、一、已に達尼爾の言を信じて車費（列車のキップ代）及び食費を備えしことなり。今、事々に変更すれば、必ず用に敷かず、囊中（財布の中）裕（ゆた）ならず。

と、素直に達尼爾の言うことを信じていたのに酷い目に遭ったと不満をこぼしている。しかし、幸いにも友人李緝甫と李佑軒の助けにより、なんとか不足の資金を調達することができた。更に、単士釐は上の文章に続けて「予、初めて東方より来る、一誠一欺、相形、頓（にわか）に異なるを嘆くを免れざる耳」と、ロシア人の性格は誠実な性格の日本人と比べて、あまりに大きく違っていることを嘆かずにはいられなかった。

日本からロシアに渡った単士釐にとって、ロシアの鉄道旅行はロシア人に接する貴重な体験であったが、同時に日本との落差を痛感する体験ともなった。というのは、『癸卯旅行記』で、彼女は汚穢極まりないロシアの車両を、

清潔な日本の汽船と対照しながら、次のような苦言を呈しているのである。

予等乗る所の車、ぞくぞく続添(途中での増結車)の故に因り僕人(旅客の用に応ずる係員)無し。盥室(手洗い)に涓滴(けんてき)の水無く、WC(トイレ)汚穢(おほわい)に堪えず、臥室(がしつ)(寢室)中、塵灰(じんかい)飛積するも、人の顧み問う無し……、俄人の優待、此の如し。(日本郵船の)「西京」、「伊勢」二船上の何等の親切を回憶し、今、此の危境を履む。(五月十九日)

「西京」とは単士釐が三月二十一日に神戸から搭乗した船である。三月二十三日に長崎で座礁したため、船室の浴室やトイレが使えなくなったが、水が出ないにもかかわらず、「幸い女僕、慇懃なれば、予の苦しむ所無し」と、給仕のお陰で不便を感じなかったと語っている。また、長崎からウラジオストックに向かった時に、彼女が乗った船が「伊勢丸」であった。四月十九日の日記に「今日、一等船室、尚お予等四人の居る所に不敷なるに因り、特に己の室を譲り、以て予等を栖ませ……」と船長が親切にしてくれた様子を日記に綴っている。

日本での船旅は快適であり、船長も親切だったのに対し、ロシアでの鉄道旅行はいつも相手に振り回され、理不尽な待遇を受けるばかりであった。外交使節の夫人の単士釐は一等車に乗るにしろ、二等車を使うにしろ、ロシア人から差別に満ちた視線を投げかけられた。更に五月十一日の日記に「華客、向に皆三等位、「西人、惟だ労働苦役の者のみ三等なり」、二等位の者有るかを問えば、則ち某車を指定し、以て之を区別せり、他の二等室に入るを許さず」とある。この記述からも分かるように、彼女の目に映った列車での清国人の境遇は、所詮は労働者と同じ三等の民に過ぎなかった。

しかし、国力の違いによって生じた差別を身近に感じながらも、西洋列強の衝撃のもとで、清国が衰退の一途を辿っている現実や、役人の無為無策も認めざるを得なかった。それゆえ、「俄人の優待、此の如し」とあるように、単士釐は自分の不満を発散させるために、ロシア人を揶揄するほかに、何もできなかったのであった。人との関わりのみならず、『癸卯旅行記』におけるロシアの駅の風景、規則、料金などを描写する場合にも、しばしば日本での諸体験が比較の対象となっている。以下、幾つかの例を挙げてみる。

①俄例(ロシアの鉄道規則)、寛(寛大)なり。閑人の(駅への)入場と登車(乗車)を任(放任)して阻む無く、日本の扱(切符)有るに非ざれば入場するを得ざるに如くは無し。(五月五日)

② 賃価、固り日本より昂し。……、日本の一等位（二等車）に在る者、（携帯品の運価）百六十斤もの重額（大きな重量）を得べきも、俄路、僅かに三十余斤（二五・三八キログラム）を得るのみ。（五月六日）

整然たる秩序を有する様や、賃金が安いという日本の鉄道事情は、ロシア鉄道の猥雑な様子を、より一層際立たせたであろう。しかし、これは文明の進んだ国と遅れた国との運輸機関の対照的な比較としても読み取れる。

『癸卯旅行記』を見ても分かるように、長い間、日本文化に深く馴染んできた彼女の中で、「日本」と「ロシア」は常に一对の合わせ鏡のようであった。彼女のロシアに対する認識は、殆ど日露両国を相互に比較対照することで形成されたものと考えられる。因みに単士釐が専制統治下のロシアにあつて、官僚達尼爾との関係やシベリア鉄道をめぐる体験は批判的だったのに対し、ロシアの美術への評価が高かつたことについてふれておきたい。五月二十四日に単士釐がモスクワにある美術館を見物した後、日記に「画院（美術館）に遊ぶ。……其の光を絵（描）く技、尤も不可思議なり。光肖れば、則ち筆の肖らざる無し。……、絵の声（となる）に至りては、技、（いよいよ）絶（絶妙）矣。此、日本、まだ見るに及ばざる所なり」と、日本では見たことのないロシア美術の技巧の素晴らしさを称賛している。

三、中国人をロシアから見る

単士釐は外交使節の夫人であるだけに、『癸卯旅行記』に登場する人物の記述は実に興味深いものがある。ロシア人は勿論のこと、旅先で出会った中国人についての描写も『癸卯旅行記』に多く見られる。例えば、五月十日の日記において、単士釐は鉄道工事に従事するために山東省や河北省からハルビンに移住した中国人労働者について、次のように書き留めている。

此等の最下・最苦の華工、昼は路（鉄道建設工事）に役し、夜は傅家甸に宿す。彼の俄工（ロシア人鉄道労働者）、固り板屋を列して路側に居する者也。俄工の汚穢、亦た華工に亜らず。然れども、公司（鐵路公司）、毎に「華工、汚穢にして疫氣（伝染病）を肇し易く、傅家甸、路（鉄道）を距つること、十里に足らず、伝染し易し」と言い、

嘖^{さか}みて煩言^{はんげん}（わづらわしき言辭）有り。

外交使節の夫人として、海外へ行く機会を得た単士釐にとって、そもそも中国の市井の人々の現実を肌で感じる機会は多くなかったはずである。この旅をきっかけとして、単士釐は中国人がどれほどロシア人による酷い差別を受けているか、いかに低賃金労働で搾取されているかという悲惨な現状について認識を深めたと言えよう。五月十八日の朝、アチンスクに到着した彼女はこのシベリアの森林地帯で、一人の中国からの行商人に出会った。

此の駅において一華人、囊^{ぶくろ}（袋）を負いて登^{のぼ}（乗）車し、絹物^{きんもつ}（絹織物）を售^うするを見る。詢^{たず}ぬるに山東人に系^かわする。售^うする所、即ち山東にて織^おる所^{（のもの）}なり。俄、他国人の入境^{にゅうこく}（入国）を禁^{きん}ずるに於いて慕^ま巖^{いげん}（甚だ巖）にして、且つ課税も重々たり。此の小販人の獲^うる所、幾何^{いくげ}なるや。而も万里を遠^{とほ}しとせず此の營生^{えいせい}（仕事）を作^なず、（此より）吾が民の生計^{せいけい}の艱^が（艱難）を想^{おも}い見^みる（可^べし）。聞^きくに、一路^{いちろ}（このシベリア鉄道の列車に乗って）森堡^{ベタルブク}に至^{いた}る（華人あり）、此等の（華人）、亦た数百名を下^{くだ}らざるも、間^ま（間々）（俄當局に）殺^{ころ}されて死^しする者あり。且つ或いは（俄官、加うるに疫^{えき}（疫病）を有するの名を以て之を虐死せしむ）。

寒気酷烈なシベリアでまで出稼ぎにくる山東人に出会い、彼の口から直接、無数の貧民がロシア人に殺されている話を聞いたことなど、単士釐はすべて日記に克明に記している。そして、異郷に生活している中国人の実態や地位を確認すればするほど、単士釐の中国の前途に対する憂慮も深まる一方であった。五月十三日、中露の国境付近を通り過ぎた時、彼女は深い感慨を込めて、「乃ち予、今日、滿境^{まんけい}（滿州）を出て俄境^{ろしあ}（ロシア）に入るも、謂^いう所の不同を見ざる也。車駅の官吏、車の員役^{いんやく}（乗務員）の服装、人種、同じならざるは無^なき也」と言っている。国の存亡に係わる瀬戸際に立っているにもかかわらず、無頓着なまま早くもロシアの文物に馴染んでしまっている中国人の様子に、彼女は大きな衝撃を受けたのであろう。

そこで、中国人の自覚を促^うそ^うとして、単士釐は五月十日の日記の中で、ロシアに占領されたフィンランドとポーランドが百年経つてもなおロシアに強く抵抗し、自国の幣制や曆法を保つよう努力している事実を紹介した。

彼の芬蘭^{フィンランド}、波蘭^{ポーランド}、亡ぼされ俄に入りて且つ百年になるも、民間、尚お格勒曆^{グレゴリー曆}（グレゴリー曆）を用い、旧幣を用ゆ。而るに哈地^{ロシア}（ロシアに統治されて）五年ならずして、已^{すで}に旧慣を忘れ、競^あいて「俄好^{ロシア}」（ロシアに逆らわない骨無し）

単士釐とロシア

に投ぜり。(此)、果たして種性、血統の不同の故による乎、抑教育久しくして忘るるの故による乎。ポーランド人と中国人におけるロシアの圧迫に対する態度の違いは、教育程度に大いに関係しているのではないかと彼女は考えていた。要するに、ロシア人を厳しく批判する態度とは反対に、『癸卯旅行記』において、同胞たる中国人に高い関心を寄せる単士釐の姿勢には際立ったものがあつた。彼女の国境を跨いで中国人への熱い視線からは、激動期を生きた知的女性の自国に対する沈痛な反省をも窺うことができよう。

四、翻訳による啓蒙の狙い

『癸卯旅行記』は、清末の女性によるロシア旅行記の嚆矢として、中国の女性では前人未踏の地域を行破した次第を述べているだけでなく、「頗る以て聞見を広むべし」という序文からも分かるように、単士釐にはこの日記の出版を通して、外国知識の中国への導入を促そうという狙いがあつたに違いない。

五月十五日、単士釐はイルクーツク駅に到着した。当時、彼女は「予、車室、未だ定まらず、且つ怨声、耳に盈ち、怒容、座に満つるに因り、故に縦観する心無し」と町を見学する気持ちになつたことを語っている。それにもかかわらず、彼女は自分では観察しなかつた町の様子を、『単騎遠征録』の訳文によって紹介している。以下、五月十五日の日記で『単騎遠征録』を翻訳した部分だけを引くことにしたい。

『単騎遠征録』、中有叙伊爾庫次克一段、録存如左。……、伊爾庫次克瀨昂噶拉河右岸、人口大約四万七千、位西伯利之中心、亦第一都会地。觀光察勢、無如此地、故留馬十日、得巡覽哥薩克騎兵、豫備歩兵大隊營、専門器械学校、陸軍病院、候補士官学校、小学校、博物館等。

ところで、『単騎遠征録』「駐馬觀光」(西村天四編、福島安正閔、金川書店、一八九四年、二七七頁)の原文は以下の通りである。

義爾克斯科は安牙爾河の右岸に瀕し、人口大約四万七千、悉伯利の中心に位し、亦第一都会の地よして、光を觀勢を察する此地に如くはなし。故に中佐 馬を此地に留むること十日、哥薩克騎兵、豫備歩兵大隊營、専門

器械学校、陸軍病院、候補士官学校、小学校、博物館を巡覧す。

二つの文章の下線部をつき合わせてみれば、単士釐は『単騎遠征録』の本文に基づいて、忠実に訳していることが分かる。そもそも自分は見学していないのだから、日記には何も記さなくてもよかつたはずである。しかし、単士釐は自分の観察できなかつた、ロシアの軍隊、学校、病院、博物館などといった近代化を支える機構について、翻訳という方法を利用して、その知られざる諸側面を読者に伝えている。

『単騎遠征録』のほかに、一九〇二年に出版された土木学者田辺朝郎（一八六一—一九四四）の『西伯利亚鉄道』も『癸卯旅行記』ではよく引用されている。以下、田辺朝郎と単士釐の文章を併記して検討してみよう。

『西伯利亚鉄道』第一編「西伯利の鉄道総説」（大空社、二〇〇四年、三頁）

明治三十三年即ち西曆千九百年の巴里万国博覧会に遊びたるものは、亜細亞露西亞の出品館に接して、西伯利旅行列車ありたるを知らん。而して其改札口、莫斯科停車場に擬するものあり。茲に乗車切符を渡せば、目前に北京直行列車のあるあり。乃ち之に乗り込みて……、此列車は一二等級各車の外に寢台車、食堂車、書房、運動、遊技、遊覧、通信、祈祷、洗身、医療、其他必要なるものは悉く之を備へたり。是れ即ち将来西伯利亚鉄道に用ひんと欲する列車なり。今此列車を通過して其一端に降れば、此処に北京の停車場に擬したる停車場あり。此を出づれば身は忽ちにして支那の出品館中に在り。抑も此列車の構造は完備十全にして、些少なる点にも意を用い。

『癸卯旅行記』卷下「五月二十三日」

庚子巴黎之万国博覧会、有所謂亜細亞俄国出品館者、中設西伯利鉄道列車、其入口処模擬莫斯科之停車場。購券入場、備觀列車之寢台、食堂、読書、運動、遊技、休息、通信、祈祷、澡浴、医療、写真暗室（為乗客途中洗写真片所）等。觀畢出口、則豁然模擬北京之停車場、示一車直達之意、俄耶？中国耶？不可思議。此異邦人所記載、而本国駐覧者一言及也。予初謂列車必如此周備、今親見者、烏有所謂読書、運動、遊技、休息、通信、医療、暗室者耶？但見食堂之隅、懸偶像為祈祷所耳。

上に掲げた単士釐の文章の中で、傍線部は殆ど『西伯利亚鉄道』の中国語訳であるが、「觀畢出口、則豁然模擬北

単士釐とロシア

京之停車場」より後の部分は、田辺朔郎の記述をそのままではないことに注目されたい。後半の文章において、単士釐は視点を変え、清国人という立場から、西伯利亚鉄道の出口が北京の駐車場に擬していることに「不可思議」の思いを表しているばかりでなく、「一車直達」にして中国を直接に侵略しようとするロシアの意図を読者に警告してもいるのだ。「此異邦人所記載」の「異邦人」とは田辺朔郎を指す。そして、日本人ほど鋭敏な觀察力を備えておらず、中露関係に無関心な清国人に対する彼女の不満は、「而本国駐覽者不一言及也」という言葉からも窺える。最後に単士釐は、「今親見者、烏有所謂読書、運動、……暗室者耶？」と言い、田辺朔郎が記したバリ万国博覽会に展示されていた西伯利鉄道の設備と現実との間には、あまりにも大きな落差があったという事実を暴露している。

上記の田辺朔郎と単士釐の文章を検討してみると、単士釐は単に田辺朔郎の文章を翻訳して、自分の日記に書き入れただけでなく、また田辺朔郎の文章からは排除された部分を、オリジナルな思考を巧みにつけ加えることによって、一つのまとまった文章を完成させていることが分かる。

次に単士釐が世界的に有名なバイカル湖を横断した時の記録を検討してみよう。『癸卯旅行記』巻下「五月十五日」に「久間の所謂碎氷船なる者に登らしむ……、船、英製なり。長さ二百九十尺、噸数は四千二百……、船腹に軌有り。船軌、路軌と湊合・銜接すれば、汽車、即ち軌に循したがいて船に入る。船、車二十七輛を容る可し……、湖を環かどむは、悉く山なり〔四周に峭立し、一隅の欠無し〕。蒼樹白雪、眼簾に錯映す……、船の碎氷する所以ゆゑんに至りては、初め衝力を以て氷を撞くに非ざるなり。故に船首、鋭からず。乃ち船機、此の氷下の水を吸ひ「氷、如何に厚きかを論ずる無く、其の四五尺下、必ず水なり」、以て舷外に噴き出す。氷、水の相い承うける無ければ、自ずと重力均平ならざるを以て裂くるを致す。更に助くるに船の推力を以てすれば、此の既に裂けし氷を推し開きて、船進む矣」とある。

日記、傍線部の内容は田辺朔郎『西伯利亚鉄道』（大空社、55頁）の「船は英国アームストロング製、四千二百噸、機関車と車輛二十五台を載することを得……、具佳爾湖の水質は清澄にして……且周囲の連山秀麗にして西伯利のアルプスと称する亦宜なり」を踏まえた表現であり、碎氷船の外見、構造、バイカル湖の周囲に連なる秀麗な氷山の景色の描写など、それぞれの記述には吻合することが多い。しかし、単士釐は日記において汽車が碎氷船と繋がれる軌道の装置や、肝腎の碎氷船前進のメカニズムなどを、精密かつ平明に記述しており、両者の文章をつき合

わせてみると、自ずと観察の精粗のあることが窺える。恐らく「ロシア知識」の来源としての田辺の著作は、単士釐にとって単に旅行案内というより、実用書としての側面が大きいであろう。無視できないのは、彼女の科学者としての眼、及び詳細広汎に観察した知識を正確に伝達しようとする彼女の強い意志である。

終わりに

以上取上げたロシアに関わる認識は『癸卯旅行記』のごく一部に過ぎないが、清末の外交使節夫人の単士釐がどのようにロシアを認識したか、またそこに描かれたロシアのイメージに日本人による影響が如何に及んだかについて、その一端を明らかにすることができれば、本稿の目的は達成されたと言える。

『癸卯旅行記』の中で、主人公である単士釐は、強健な身体を持ちながら、昂然として自立し、時代の流れに能動的に対応していく自覚と知識を兼ね備えた女性像をはつきりと打ち出している。この良妻にして同時に時代の脈動を十分に把握した二十世紀初期の知的女性像は、繊細優美な詩文の世界に耽溺したり、或いは文武両道に秀でることを良しとした清乾嘉期の才媛とは明らかに異なるものであった。

『癸卯旅行記』には、単士釐自身の観察が記されているだけでなく、多くの事柄が夫や現地の人から聞き取って書かれている。その旺盛な好奇心は、『癸卯旅行記』にここちよい緊張感をもたらしている。更に、ロシア人の気質、鉄道事情、芸術などを分析する際に、常に日本との比較を通じて捉えているのが特徴的であり、それも『癸卯旅行記』の文学的な魅力の源泉のひとつになっていると思われる。

ロシアへ渡った経験は、単士釐にロシア事情に関する新たな認識をもたらしただけでなく、離散した華人の記録を書き留めようという意欲をも大きく刺激した。彼女が記録した、国境を越えてロシアに生きる清国人の情報は断片的なものではあるが、同時代の男性文人の手になるロシア旅行記からは殆ど窺い知ることができないため、十九世紀末におけるロシア移民やシベリア鉄道の建設に参加した中国人労働者の動向を把握する資料として注目に値する。

『癸卯旅行記』において、単士釐は日本に好意的だったのに対し、ロシアについてはネガティブな描写が多かった。その憧憬と偏見とが交錯する複雑な眼差しは、彼女の日本体験に大きく関係しているのではないかと推測される。たとえば同じように日本滞在経験のある梁啓超は、旅行記『汗漫録』の中で、自分の日本に対する愛情は故郷に匹敵するぐらいだと吐露している³⁹。単士釐もまた梁啓超と同様に、「寄居も又た久しければ、東国を見ること郷井の如し」（『癸卯旅行記』「自序」）と言い、日本に深い感情を持っていたことが容易に窺われる。日本で生活している間、単士釐は日本の教育制度、近代的工業建設についての理解を深めており、そうした体験が『癸卯旅行記』執筆の際に、大きな影響を与えたと考えられる。『癸卯旅行記』における福島安正や田辺朔郎の著作の引用も、以上のような事実を裏づけるものである。というのは、これらの予備知識がすでに彼女の中に消化されていたからこそ、引かれた内容が、中国の対ロシア認識の不足している部分に殆ど的中しているのだ。したがって、彼女の翻訳は、ただ日本人の先行著作を紹介するというものにとどまらず、単士釐の中国歴史や国際情勢に対する洞見の深さをも自ずと証明していると考えられよう。単士釐は秋瑾や何香凝のように直接中国の革命運動に参加しなかつたとはいえ、彼女が中国人の危機意識を喚起するために注いだ努力や、中国の啓蒙に対する貢献を考慮するならば、十全に外交官夫人としての役割を發揮した女性として高く評価すべきではなからうか。

『癸卯旅行記』においてロシア人を強く批判する単士釐の厳しい態度は、実は当時の日本への留学生を中心とする新しい中国知識人に普遍的に見られる特徴と言ってもいい⁴⁰。一九〇〇年、ロシアは義和団の乱に乗じて満州を不法占領した。後に清朝が八カ国連合軍に屈服し、「北京議定書」を締結させられると同時に、ロシアは列強から満州撤退を迫られ、三期一年半で撤兵することになっていた。しかし、ロシア軍は第二期限の一九〇三年四月になつても撤兵せず、日露は一触即発の状態になった。この時、満州侵略に抗議するために、東京の留日中国人学生は「拒俄運動」を発動し、単士釐の長男の妻である包豊保も積極的にこの運動に参加したという⁴¹。とにかく、当時の在日中国人がロシアに強い敵対心を持っていたことは疑いのない事実であり、単士釐がこの風潮を知らなかつたとは考えにくいのである。

ここで清末の男性官僚が書いたロシア紀行の特徴を少し振り返ってみよう。『癸卯旅行記』では繆祐孫という人物

に触れている（四月十日）の記述。繆祐孫は一八八七年に遊歴官選抜試験に合格し、ロシア遊歴を命じられた。一八八九年に出版された繆祐孫『俄遊彙編』の巻九から巻十二が、彼のロシア滞在日記となっている。佐々木揚氏は『俄遊彙編』の特色として、中国古典に典拠を持つ語句が頻出すること、ロシア人に好印象を抱いたこと、ロシアの中国に対する脅威をさほど深刻に受けとめていないことなどを挙げている。②そして、後の王之春『使俄草』（一八九五年、楊宜治『俄程日記』（一八九五年？））にも、繆祐孫『俄遊彙編』を踏襲した記述がかなり多いことが明らかにされている。③

以上取上げた男性文人のロシア紀行から窺えるロシア観が、単士釐のそれと大きく相違することは明らかであろう。男性官僚と異なつて、単士釐はただ中国の立場からロシアを捉えるだけでなく、日本からの視野をも幅広く取り入れているため、彼女の描いたロシア像は、自ずと男性文人の他者への凝視との大きな差異を生じるに至つたのではあるまいか。したがつて、清末におけるロシア旅日記の系譜の中で『癸卯旅行記』は確かに異質な存在であり、別の角度から中露関係の裏面史を語る重要な証言でもある。のみならず、シベリア鉄道、東清鉄道を舞台にして、戦乱、流民、差別的表現、近代的設備などを織り合わせた『癸卯旅行記』は、まさに清末から近代への過渡期における文学の複雑性及び日露戦争前夜の時代性を最もよく反映する作品と言えよう。

注

- (1) 谷川栄子「近代中国女性の見た日本・朝鮮・ロシア・中国——銭単士釐『癸卯旅行記』を通じて」（『国際関係研究』22-3、二〇〇一年）、同「癸卯旅行記」に見られる銭単士釐の女性観」（『国際関係研究』22-4、二〇〇二年）、拙稿「単士釐と日本——《受茲室詩稿》と《癸卯旅行記》をめぐつて」（『九州中国学会報』第四十五号、二〇〇七年）を参照。

- (2) 鈴木智夫『癸卯旅行記訳註』（汲古選書、二〇一〇年）。この訳注は現在、単士釐を研究する上で最も有益な手引きと言える。

- (3) 佐々木揚『清末中国における日本観と西洋観』（東京大学出版会、二〇〇〇年）二八九頁を参照。
- (4) 『癸卯旅行記』は一九〇四年に東京の同文印刷により発行され、上海の国学社はこの本の販売総代理店であることが、鈴木智夫前掲書（「解説」註10、十頁）によって初めて確認された。
- (5) 青山治世「清末の出使日記とその外交史研究における利用に関する一調査」（『現代中国研究』第二十二号、二〇〇八年）四十一頁を参照。
- (6) 『癸卯旅行記』巻下、五月七日に「予等就停車場食堂稍憩、入一等待合室。守者睨視久、蓋華人向不乘一等待位也」とある。
- (7) 比較を通して異文化を捉えようとする単士釐の観察姿勢は、三月十五日の日記における「且予得一覽歐洲情状、以与日本相比較、亦一樂事」という言葉からも裏付けられる。
- (8) 単士釐が『西伯利鉄道』を引用した回数九回に及ぶ。鈴木智夫前掲書、註64、95、107、110、111、122、124、125、133。
- (9) 梁啓超は旅日記『汗漫録』（一八九九年十二月十九日）で「吾於日本、真有第二故郷之感」と言う（『歴代日記叢鈔』第一四五冊所収、学苑出版社、二〇〇六年）。
- (10) 巖安生『日本留学精神史——近代中国知識人の軌跡』（岩波書店、一九九一年）第四章「在日留学生と日露戦争」を参照。
- (11) 黄慶福『清末留日学生』（中央研究院近代史研究所、一九八三年）第四節（1）「拒俄学生軍的組成及其活動」、周一川「中国人女性の日本留学史研究」（『国書刊行会』二〇〇〇年）六十六頁、及び鈴木智夫前掲書註5は、東京で「拒俄運動」に参加した包豊保のことを論じている。
- (12) 佐々木揚前掲書、第三章第三節「繆祐孫のロシア調査」を参照。
- (13) 佐々木揚「日清戦争後半期における清朝官僚のロシア派遣——王之春『使俄草』と楊宜治『俄程日記』について」（『東方学論集』東方学会創立五十周年記念、一九九七年）を参照。